The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フッサールとシュッツ : 対話としての臨床哲学のために
Author(s)	浜渦, 辰二
Citation	メタフュシカ. 2008, 39, p. 13-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7360
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フッサールとシュッツ
──対話としての臨床哲学のために──

浜渦辰二

はじめに

私たちはどのような世界に生きているのか。それをきちんと記述することは、それだけで一つの課題となる。私たちは、ふだん、どういう世界に生きているのかよく考えもしないで生きているからである。この課題をフッサールは「生活世界の存在論」と呼んだ。他方、私たちが生きている世界を支えている根拠ないし「可能性の条件」を問うことは、それとは違う次元の問いとなる。私たちが生きている世界を記述する時には、その世界の枠組みとなっていて、余りに「あたりまえ」なので、あえて記述しようとしないようなことに目を向けることになるからである。言わば、現れているものを現れさせていながら自らは現れないものを問うことになる。この課題をフッサールは「超越論的現象学」と呼んだ。

現象学の出発点となった『論理学研究』〔以下、『論研』と略記〕で、彼は次のように述べていた。「哲学者はまさに《自明なこと》の背後に最も困難な諸問題が隠れていることをも当然承知していなければなるまい。逆説的ではあるが、しかし深い意味をこめて、哲学とは平凡な事柄（Trivialitäten）についての学であるとさえ言えるほどである」（XIX/1, 350）[1]。彼が、自然的態度に対する現象学的還元によって開かれる超越論的現象学という構想で考えていたことも、この哲学の精神と別のことではない。自然的態度とは「自然に実践的に経過する人間生活全体の遂行形態」（VII, 244）のことであり、この自然的態度においては「匿名的」に機能している「隠れた構成的能作」（I, 84; VI, 96）を明るみにもたらすことこそ、超越論的現象学の課題とされた。彼にとって哲学とは、自然的態度にあるふつうの人にとってあたりまえのこと（自明性）を否定することでも、覆すことでも、除去することでもなく、その「自明性（Selbstverständlichkeit）を理解（Verständlichkeit）にもたらすこと」（VI, 184）に他ならず、現象学的還元とはそのための方法に

[1] 以下、『フッサール全集（*Husserliana*）』からの引用は、本文中括弧内に、ローマ数字で巻数、アラビア数字で頁数を示す。

他ならなかった。

冒頭で二つの課題を挙げたが、前者の課題「生活世界の存在論」と後者の課題「超越論的現象学」は実は絡み合っていて、互いに互いを必要としている。前者は後者抜きに完結するものではなく、その完結のためには後者を要求し、他方、前者の課題を十分に果たすなかから初めて後者の課題に応えることも可能になり、後者の課題を応えるには前者の課題に十分習熟する必要がある。こういう主張を私たちは、フッサールが 1925 年の講義『現象学的心理学』で「現象学的心理学と超越論的現象学」という二つの段階を論じていることのうちにも読み取ることができる。それはまた、晩年のフッサールに接したアルフレッド・シュッツが、フッサールから学びつつ離れていった地点でもあった。小論では、この 2 人の思想的関係を明らかにすることによって、二つの課題の相互補完的関係を積極的なものとして捉え、対話としての臨床哲学を考えていくための手がかりとしたい[2]。

1．前期シュッツにおけるフッサール

シュッツは、初めフッサールの『論研』と『純粋現象学および現象学的哲学のためのイデーン第Ⅰ巻』（以下、『イデーンⅠ』と略記）を読んだとき、自分の関心をもっていた問題への橋渡しをそこに見出すことができなかった。その後、『形式的論理学と超越論的論理学』（1929 年）〔以下、『論理学』と略記〕のなかで、間主観性（Intersubjektivität）の問題が焦点に据えられているのを見たとき、自分の心をとらえていた問題すべてにとってフッサールの思想がもっている重要性をはっきり認識し、そこから改めて『論研』と『イデーンⅠ』も読み直すことになった、という。間主観性の問題こそ、マックス・ウェーバーの研究から社会学の哲学的基礎づけに関心を持っていたシュッツにとって、フッサール現象学が重要と思われたものであった。こうして、シュッツの処女作『社会的世界の意味構成』（1932 年）〔以下、『構成』と略記〕は、ウェーバーの理解社会学をフッサール現象学に、正確に言えば、その間主観性の現象学によって基礎づけようとしたものであった。

しかし、同書のシュッツは、フッサール現象学から多くを学びながらも、それをそのまま継承するのではなく、とりわけその超越論的現象学という考えに対しては、距離をとろうとしていた。シュッツは、「内世界的な（mundan）な社会性における意味現象を分析する本書の意図は、これを超えていく超越論的経験の獲得、したがってまた超越論的現象学的還元にとどまる必要はない」（*Aufbau*, 56）[3]と述べ、自分は「“現象学的心理学者”にとどまる」（ibid.）ことを宣言する。つまり、「超越論的主観性と超越論的間主観性の問題圏については意識的に断念しつつ、“現象学的心理学”を追求する。それは、純粋な間主観性の心理学であり、“自然的態度の構成的（konstitutiv）現象学”

---

[2] 本稿は、ドイツ語で発表しチェコ・プラハで出版された拙稿（“Schütz und Husserl - Zur Phänomenologie der Intersubjektivität - ”, in: *FOCUS PRAGENSIS, Yearbook for the Philosophy and Phenomenology of Religion,* 2004.）を「対話としての臨床哲学のために」という新たな枠組みのもと日本語で書き改めたものである。

[3] 以下、『構成』（Schutz, Alfred: *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*, 1932, zitiert aus der Suhrkamp Taschenbuch-Ausgabe, 1981）からの引用は、*Aufbau* の略記とともにズールカンプ版の頁数を本文括弧内に記す。

にほかならない」（ibid.）というわけである。このあたりの経緯を少し詳しく見ておこう[4]。

シュッツがフッサールの間主観性の問題と出会ったという『論理学』の問題の箇所は、第 96 節「間主観性と間主観的世界の超越論的問題」だった。それに先立つ第 95 節「各自的主観性から出発する必要」で、フッサールは、「我あり」を「志向的原根拠」と呼び、それをまた、「私が持ちこたえねばならない原事実、私が哲学者として一瞬たりとも目をそらしてはならない原事実」（XVII, 244）と呼んでいる。そして、シュッツも後に「現象学と社会科学」（1940）で引用しているように、「ただ哲学の未熟者だけが、独我論の妖怪、あるいは、心理主義や相対主義の妖怪がそこに出没すると恐れる暗い片隅である。だが、真の哲学者は、そこから逃げ出すのではなく、この暗い片隅に光を当てなければならない」（ibid.）とフッサールは述べている。それに続けて書かれた第 96 節における「間主観性と間主観的世界の超越論的問題」のスケッチこそが、シュッツを動かしたものであった。ただ、それはあくまでスケッチにとどまり、その節の最後につけられた脚注で、フッサールはこう述べていた。「間主観性の問題の解決と超越論的独我論の克服についての主要部分を私はすでにゲッティンゲン（1910/11）の講義で展開した。しかし、実際の遂行はなお困難な個別研究を必要とし、それはずっと遅くなってから結末に至った。その理論の短い叙述を与えているのは、さしあたり、私のデカルト的省察である。それに関する詳しい研究を来年には出版できると期待している」（XVII, 250）[5]と。

ところで、この『論理学』の第 96 節が収められているのは、「超越論的現象学と志向的心理学」と題された第 6 章であり、その第 99 節では、心理学的主観性と超越論的主観性とを区別し、それに対応して、心理学的現象学と超越論的現象学とを区別し、両者の間には、「並行関係」（XVII, 262）があるとする。それは、心理学と超越論哲学の間の「ラディカル」な区別を意味する一方で、「さしあたり心理学的に行われた分析が、超越論的に向けられる」（XVII, 259）とも述べられる。「心理学とともに、世界をすでに素朴に前提している、という循環」が生じることを指摘しながら、両者の関係について、ここでは、これ以上展開されていない。

実は、この二つのものの「並行関係」をめぐる問題は、1925 年の講義『現象学的心理学』で取り上げられたものであり、この時期のフッサールが強調していた論点の一つであった。1927 年の「ブリタニカ草稿」での現象学の紹介でも、「現象学的心理学と超越論的現象学」という枠組みで論じられ、同じことが、『論理学』の翌年に発表された「あとがき」でも、展開されてい

---

4 シュッツがフッサールに関心を持つようになった頃、それはフッサールにとって出版活動がもっとも充実していた時期であった。フッサールは、1916 年にフライブルク大学へ就任して以来、1928 年に退官するまで、一冊も書物を出版していない。ところが、1928 年に、1905 年の講義以来の原稿を編集した『内的時間意識の現象学講義』が出版されたのを皮切りに、1929 年には『論理学』、1930 年には「あとがき」を、そして、1931 年には、1929 年パリとソルボンヌで行った講演に基づいて『デカルト的省察』のフランス語版が出版された。シュッツは、これら続々と現れるフッサールの著作を読みながら、彼の『構成』を練っていったことになる。残念ながら、フッサールが間主観性の問題を集中的に取り扱った『デカルト的省察』にシュッツが目を通したのは、彼の原稿の脱稿後であったため、それに本格的に取り組むことはできなかったが、注のあちこちで同書への参照を指示している。

5 ここに言う、ゲッティンゲン講義は、現在、『フッサール全集』第 13 巻『間主観性の現象学』の第 1 巻に「現象学の根本問題」というタイトルで収録されており、デカルト的省察は、前述したように、2 年後にフランス語版が出版されたものを指している。

る[6]。

この「あとがき」は、1913 年に出版された『イデーンⅠ』の超越論的現象学に対する批判に答える形で書かれたものであるが、そうした批判をフッサールは、「世界内的（mundan）主観性（人間）から“超越論的主観性”への上昇を理解しないところから出てくる異論である」（V, 140）と言う。フッサールによれば、「一方の超越論的現象学と、他方の“記述的”心理学または“現象学的”心理学の間にある差異……現象学的心理学と超越論的現象学との間には、一つの注目すべき汎通的な並行関係がある。……単なる態度変更から生じる“微妙な差異（Nuance）”こそ、或る重大な意義を持ち、真正な哲学にとって決定的な意義を持つ」（V, 147f.）ということになる。そして、「純粋な内部心理学、志向性の真正の心理学は、自然的態度の構成的現象学であることが分かってくる」（V, 158：強調は引用者）と述べる。先に、シュッツが、フッサールの超越論的現象学に対して、自らの立場を「現象学的心理学」とし「自然的態度の構成的現象学」であるとしていたが、その際シュッツが念頭に置いていたのはこの箇所であった。

シュッツが処女作『構成』をフッサールに献本した時につけた手紙にも、上記のような自らの立場について、はっきり触れている。「あなたによって展開された超越論的間主観性の問題圏のうちに、私は、長い間私を悩ましてきた、ほとんどすべての問題への鍵を見出した。私の本は、因みに、専ら間主観性の問題を自然的な領土で扱い、超越論的な問題の解決や解明については意識して断念したものですが、それは、あなたの根本的な認識をはるかに控えめな、しかし、社会学的分科学の研究しつくされていない作業場に適用する試みにほかなりません」[7]と。シュッツは、超越論的現象学ではなく「自然的態度の構成的現象学」が自分の作業場であることを初めから明言しているわけである。

それに対して、フッサールは一週間後には、フライブルクの自宅に招待する返事を送っており、そこには彼がシュッツの著作に感銘を受けたことが読み取れる。これも有名な手紙でよく知られているが、一部を引用すると、「小生の畢竟の作の深遠なる意味、いかんせん会得し難き意味につきこの上なく透徹したご理解をお示し下さる僅々のひとり、そのように真摯かつ学識豊かな現象学者、かつこの有望なる継承者として、真なる永遠の哲学の代表者として、ただただ前途有望たる哲学者としてお見受けしたる貴公に是非とも見えたく存じます」[8]として、フッサールはシュッツに来宅されることを切望している。

これを、表面的な美辞麗句とみなす向きがあるかも知れないが[9]、シュッツが初めから自分の

---

6 更に、『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』の第 3 部 B「心理学から現象学的超越論哲学への道」も、同じ構図のなかで考えられている。

7 *Husserliana, Dokumente Bd. III, Briefwechsel*, Bd.IV, S.482.

8 Ibid., S.483.

9 穿った見方をすれば、この時期フッサールは、かつて「私とあなたが現象学だ」と言ったハイデガーとの共同作業となるはずの「ブリタニカ論文」執筆に挫折し、かつては自分の後継者と見なしていた、そして、現に、フライブルクのフッサールの教授ポストに後任として着任したハイデガーとの分裂が明かとなり、自分の学問上の後継者を見失っていた頃で、その時に彗星のように『構成』をもって現れたのがシュッツであった。同書には、フッサールが公刊したばかりの『内的時間意識の現象学』『論理学』「あとがき」『省察』で展開した議論が、それなりの仕方で取り込まれていた。フッサールは、シュッツに自らの後継者の可能性を見てもおかしくはなかっただろう。

立場を超越論的現象学ではなく「自然的態度の構成的現象学」「現象学的心理学」にとどまるものだと明言しながら近づいたにもかかわらず、フッサールがシュッツを高く評価したのは、単なる美辞麗句とは思えない[10]。むしろ、フッサールの「現象学的心理学と超越論的現象学」という枠組みそのもののなかに、シュッツの現象学的社会学を受け入れ歓迎する素地があったと言うべきであろう。

２．後期シュッツにおけるフッサール

ナチから逃れて米国に亡命し、ニューヨークのニュースクールで新しい研究活動を開始した後期シュッツは、ウィーンにいた頃から関心をもっていたパーソンズらのアメリカ社会学、前後して亡命してきたギュルヴッチ、あるいは、ジェームズ、ミードといったアメリカの哲学者、社会学者との交流を深めていくが、そのなかでシュッツが絶えず振り返り、取り上げ、議論をする原点となっていたのが、フッサールであった。ヴァン・ブレダによってナチの手から救出されたフッサールの遺稿が、ベルギー・ルーヴァンに保存され、それに基づいてフッサール文庫が創設され、遺稿を編集する作業が始まり、1950 年の『デカルト的省察』〔以下、『省察』と略記〕を第 1 巻として『フッサール全集』の刊行が始まるが、シュッツは新たに刊行されていく巻にも目を通し、1952 年刊『イデーンⅡ』、1953 年刊『イデーンⅢ』には、書評を書いている。ほかにもいくつかの論文でフッサールの現象学を取り上げているが、なかでももっとも重要なのは、1957 年パリ郊外ロワヨモンでのフッサールに関する討論会で発表され、フィンクやインガルデンも参加した議論も添付された論文で、それは、「フッサールにおける超越論的間主観性の問題」[11] と題されている。まさに、シュッツにとって出発点になった問題が、ここで議論されているわけである。処女作『構成』を出版してから 25 年間のフッサール現象学との取り組みが、この論文には凝縮されている。『構成』にはなかったシュッツの新しい論点を、かいつまんで見ておこう。

目新しいことは、何より『省察』の取り扱いである。前述のように、1931 年に出版されたばかりのフランス語版をシュッツが読んだのは、『構成』を脱稿した後であり、わずかにいくつかの注で、参照箇所を示したのみで、「その学説を提示するにあたってこれを本書に含めることはできなかった」（*Aufbau*, 60）にもかかわらず、「フッサールの『省察』特に第 5 省察は、この問題の重要性をきわめて透徹した分析において提示しており、この問題の解決にとって重要な手がかりを提供している」（*Aufbau*, 193）と、その内容については、期待的な評価にとどまっていた。それに対して、1957 年ロワエモンでのシュッツの発表は、すでに 1950 年に『フッサール全集』第 1 巻として刊行された『省察』のドイツ語版を読み込み、「そこで示された問題の解答を一歩一歩検討していく」（SIII, 55）[12] ものである。

---

[10] 現に、フッサールは訪ねてきたシュッツと意気投合をし、すぐさま、出版されたばかりの『省察』と『論理学』の書評を依頼している。その後フッサールは、1935 年プラハとウィーンで講演を行い、それがフッサール生前最後の出版である『危機』書となっていくが、シュッツはこれらの講演も聴講しており、亡くなる前年のクリスマスまでフッサールと交流をもっていた。

[11] Schutz, A.: “The problem of transcendental intersubjectivity in Husserl,” in *Colleted Papers III*, Martinus Nijhoff, 1975.

[12] 以下、『シュッツ著作集』（*Collected Papers*）からの引用は、本文中括弧内に（*Husserliana* からの引用と区別するため）“S”とローマ数字で巻数、アラビア数字で頁数を示す。

ここではその細かい論点に立ち入ることはできないが、全体的な評価としてシュッツは、この『省察』における議論、「超越論的自我の意識能作の観点から超越論的間主観性の構成を説明するフッサールの試みは、成功していないと結論せざるをえない」（SIII, 82）と、はっきり断言する。そこには、「私の非常に敬愛する師のこの理論の研究に私が 25 年間を費やしても克服することができなかったいくつかの難点」が解決されておらず、「フッサールの論証はここにおいて明らかに失敗している」（SIII, 87）と言うのである[13]。

それでは、「失敗している」ことの原因をシュッツはどこに見ているかと言えば、彼はこう述べる。「フッサールがこの問題に解決を見出すことに失敗したのは、生活世界における社会的現実の存在論的地位を、超越論的主観の意識能作の観点からみて、それがもつ超越論的な意味を解明するというよりも、超越論的主観の構成的所産としてそれを解釈しようとしたことに原因がある、ということです」（SIII, 87）と。つまり、「本質的な難点」は「現象学の展開過程において構成の概念が被る意味の変容」（SIII, 83）にあり、つまり、「現象学の初期においては、構成は意識生の意味構成の明確化や、すべての思惟対象を進行中の意識生の志向的な能作に遡りつつ、その歴史の観点から沈殿物を吟味することを意味していた。それらは実証諸科学、とくに社会的世界に関する実証諸科学の基礎づけにとって最大級の重要性をもっている。……しかし、構成の考え方は、意味構造の明確化や、存在の意味の解明から、存在の構造の基礎づけへと、目立たぬかたちで、しかも大半は無意識的に、変化してきているように私には思われる。それは、解明から創造へと変わったのである」（SIII, 83）[14] と。

しかし、私の見るところでは、フッサールの文献のなかで、「構成」という語の用法には確かに揺らぎがあり、大きく分類すると、能動形で使われる「構成する（konstituieren）」と、受動形で使われる「構成される（sein/werden konstituiert）」と、再帰動詞形で使われる「構成される（sich konstituieren）」の 3 種類があり、フッサール自身必ずしも一貫しているわけではないが、「構成される」という再帰動詞形が最も重要で、フッサールの思想の核心を示しているように思われる[15]。「世界が超越論的主観性のうちで構成される」という時、超越論的主観性は世界を構成する主体なのではないし、「超越論的我のうちで他我が構成される」という時、超越論的我は他我を構成する主体なのではない。それは、あくまで世界が、他我がそこにおいて構成されてくる場を示していると言うべきだろう。『構成』のシュッツが読んだ『論理学』のなかでも、フッサー

---

[13] シュッツは、アメリカに現象学を紹介し、現象学的社会学を根付かせる努力をしてきたが、そのなかで、フッサール現象学にも触れ、評価しつつも、いくつかの困難な問題を指摘してきた。そのなかで、自分の課題は超越論的現象学ではなく自然的態度の構成的現象学である、という主張は、あちこちに見られるが、「シェーラーの間主観性理論と他我の一般定立」（1942）で「フッサールの理論には、いくつかの難点が存在している」と述べていたのを除き、ここロワエモンでの発表に見られるような、「失敗している」というはっきりした断言は、見られない。

[14] ここでシュッツは、フィンクがブリュッセルの現象学国際会議（1951）で主張した、「フッサールにおいて“超越論的構成”の意味は、意味形成と創造の間で揺れていた」（“Die intentionale Analyse und das Problem des spekulativen Denkens”, in: *Nähe und Distanz*, S. 152）というテーゼに従っている。

[15] この点については、次を参照。拙稿「フッサールと自己組織性」（統合学国際研究所編『複雑系、諸学の統合を求めて』晃洋書房、2005 年、277-291 頁）。

ルは、「構成」を「形成される（sich bilden）」（XVII, 173）と言い換えていた。

現に、『構成』のなかでシュッツは、「構成」の概念を説明しながら、次のように述べていた。「私の眼前にあるのは既に構成されてしまった世界ではなく、絶えず新たに構成される世界である。……自己構成的世界として、つまり出来上がった世界としてではなく、むしろ自らを構成する世界として、この世界は、自我の意識生活という最も根源的な事実を遡って示しているのである。……けれども素朴な日常生活のもとでは、すなわち自然的態度のもとでは、私は意味付与作用そのもののうちに生きており、この作用のなかで構成される“客観的意味”という対象だけが眼差しに入るにすぎない。……自然的世界を“括弧でくくり”、現象学的還元のなかで私の意識体験自体をひたすら凝視するときに、私ははじめてこの構成過程に気づくのである」（*Aufbau*, 47）。このような「構成」の考え方については否定的ではなかったからこそ、シュッツは自らの課題を、超越論的現象学とすることは断念しながらも、「自然的態度の構成的現象学」と呼んで、「構成」という語を使うことをためらいはしなかった。

同様に、「現象学のいくつかの主要概念」（1945）のなかでも、「構成」を発生的現象学の方向に捉えて、こう述べていた。「われわれの精神は、ひとつひとつの操作の段階を経て或る思惟を構築するが、振り返ってみる時に、この全過程とその帰結を単一のまなざしで見ることができる。或る一定の所与の時点における、或る対象についてのわれわれの知識は、その知識を構成してきた、以前の心的過程の沈殿物以外の何ものでもない。そうして知識は、それ自体の歴史を有する。知識の構成のこの歴史は、或る対象についてのそうした我々の知識の構成を問うことによって見出される。そのことがなされるのは、われわれの思惟の、外見上の既成の対象から、それが一歩一歩そのなかでまたそれによって構成されたきたわれわれの精神の様々な活動へと、目を戻すことによってである」（SI, 111f.）と。

もし、「構成」の概念をこのように理解して、それを「超越論的我において他我が構成される」という問題にも適用して考えていけば、必ずしもシュッツが『省察』を取り上げて一歩一歩批判する形で「失敗している」という結論へと導いたのとは、違う読み方もありえたのではなかろうか。実は、それは、後期フッサールが発生的現象学という形で辿ろうとしていたことだったように私には思われる。

３．シュッツが読むことのなかったフッサール

シュッツは、このロワエモンでの発表のなかでも、自ら、超越論的間主観性に関わる難点に対しては、「おそらくは、間主観的構成についての未刊行の草稿群が説明を与えうるであろうが、目下の研究は出版されたものを越えて論じることはしない」（SIII, 78）と断っていた。実際、1950 年から刊行が始まった『フッサール全集』のうち、1959 年に亡くなったシュッツが参照することができたのは、第 7 巻の『危機』書（1954）までであり、そのあと、現在第 39 巻まで刊行されている『フッサール全集』をシュッツは見ることができなかった。シュッツは、フッサールが『イデーンⅠ』のなかで、間主観性の問題については残されていて、これについては『イデーンⅡ』で扱うことを予告していながら、それが出版されないままになっていることについて、

晩年のフッサールに尋ねたことがある。そのとき、「『イデーンⅡ』を出版しないままにしている理由は、『省察』の第5省察で解決済みと信じていた間主観性の問題に対して、その時点で満足のいく解決を見出していなかったからである」とフッサールは述べたという。1952年に『フッサール全集』第4巻として『イデーンⅡ』が刊行された時、シュッツは早速これを読み、書評を書いた。それは、他者経験について、自然主義的態度における他者経験と人格主義的態度における他者経験について、分裂した記述が見られるものの、超越論的な間主観性の問題については、何ら解決が示されない、期待はずれのものであった。

そのあとに刊行された『フッサール全集』のうち、めぼしいものだけを挙げても、『第一哲学』や『現象学的心理学』といった講義録でも他者経験について論じられているし、『間主観性の現象学』3巻には、現象学の最初のアイデアが浮かんだ頃の1905年から始まり晩年の1935年までの30年間におよぶ、フッサールの間主観性の問題と取り組んだ草稿が集められているが、シュッツはこれらをまったく目にすることはなかった。ここでは、結局、シュッツは、基本的に、生前に刊行された著作のみで、フッサールの間主観性の現象学を論じていた、ということだけを確認するにとどめる[16]。

４．間主観性の自然的な次元と超越論的な次元

さて、間主観性の問題をめぐるフッサールとシュッツの対立を振り返ってみると、前者がそれを超越論的現象学において解明しようとしていたのに対して、後者は、自然的態度の構成的現象学、現象学的心理学、生活世界の存在論にとどまって解明することを自らの課題とした、しかも、初期シュッツは、超越論的現象学の重要性を認めつつ、自らはそこに突き進むのは断念したのに対し、後期シュッツは、フッサールの超越論的現象学は失敗していると断言して、自然的態度の構成的現象学にとどまることを正当とした。そして、「他者たちの存在は、いったい超越論的領域の問題であるのか否か、間主観性の問題が存在しているのは、複数の超越論的自我の間であるのか、それとも複数の人格の間であるのか、つまり、間主観性それゆえ社会性は、むしろわれわれの生活世界の内世界的な領域にもっぱら属しているのではないか」（SI, 167）と問い、「間主観性の問題が何よりもまず、“まったく経験野世界としての生活世界の存在論”（『危機』第51節）というテーマにされなくてはならないのかどうかという問題は、ここでは追求しないことにしよう」（SIII, 82）と言いながら、「超越論的な構成的分析ではなく、そのような生活世界の存在論だけが、あらゆる社会科学の基礎である間主観性の本質的連関を明らかにしうる」（ibid.）と結論づける。

こうして、間主観性の問題をめぐる2人の姿勢を対比させる時、生活世界と超越論的主観性が相反するものとして対立しているかのように見える。しかし、フッサール自身は、この両者をそのように考えていたわけではない。生活世界の存在論は、フッサールにとってあくまでも超越論的現象学に至る道として構想されていた。「存在論を越えて現象学へ」というのがフッサール現

[16] 詳しくは、前掲拙稿（注2）参照。

象学への道であり、「存在論的」なものは「超越論的」なものへと導かれねばならないし、「超越論的」なものは「存在論的」なものを通じて初めて獲得される。生活世界は超越論的現象学に至る一つの道だということを忘れてはならない[17]。そうすると、上のような対比の構図で済ますことができなくなってくる。

フッサールが『省察』の第五省察で「他者経験」の問題に着手する時、彼はそれを「客観的世界の超越論的な問題」の一環として提出しているが（I, 121f.）、これは彼が他者経験の問題と客観的世界の問題とを或る連関において捉えていることに他ならない。この繋がりに沿ってフッサールは、「内世界的に存在する他者」の経験を「手引き」にしながら、「まだ内世界的という意味を持たず」、客観的世界の構成に超越論的に関与している他の主観性としての「超越論的他者」の経験へと考察を進める（I, 122f., 137）。このようなフッサールの考察の枠組みを無視して、そこに人格的他者の問題のみを読もうとすれば、シュッツのように、他者と間主観性の問題は生活世界の内世界的な問題であって超越論的な問題ではないということになり、もはや先の二つの問題の連関は失われてしまおう。

シュッツは、すでに『構成』のなかで、「自然的態度の構成的現象学」という立場を説明するにあたって、「自然的見方における他我の一般定立」（*Aufbau*, 137）という表現を使っていた。これは、フッサールが自然的態度を特徴づけるのに使った「自然的態度の一般定立」（I, 60）という言い方を、他者問題へと転用した表現である。この言い方をシュッツは後期になっても使っている。そして、「われわれがこれまで“他我の一般定立”として記述してきたことはすべて、内世界的な領域でのわれわれの諸々の体験を記述したものである。それは、フッサールが“超越論的現象学”と対照させて“現象学的心理学”と名づけたものの一部をなしている」（SI, 175）と述べている。

しかし、この「自然的見方における他我の一般定立」という言い方を『構成』で初めて使い、それをまた「他我があらかじめ与えられていること（Vorgegebenheit von alter ego）」（*Aufbau*, 28）とも呼んだシュッツが、「自然的態度の一般定立」（*Aufbau*, 137）については、それをそのまま前提するわけにはいかないことを、ウェーバーを批判しつつ指摘していた。『構成』の冒頭で彼はこう述べていた。「彼〔ウェーバー〕は、世界一般が、したがってまた社会的世界の意味現象を、間主観的に一致するものと素朴に前提することで満足している。……とはいえ、日常生活のこうした表象を無批判に学問の概念装置のなかに取り入れることは、おそらくしっぺ返しを受けるにちがいない」（*Aufbau*, 16f.）と。そして、こう続けていた。「日常生活における“自明のもの”をなんの吟味もせずに受け入れてしまうことは、社会学にとって、重大な危険を背負うことにほかならない。……社会学の課題は、まさにこの“自明のもの”を問いに付すことにある」（*Aufbau*, 17）と。これは、小論冒頭で引用したように、フッサールが哲学について述べていたことにほかならない。彼は、この「日常生活における“自明のもの”」を、世界のみならず他我へも広げ、

[17] この辺りの論点については、拙著『フッサール間主観性の現象学』（創文社、1995 年）の第６章「生世界と超越論的主観性」を参照されたい。

二つのことは根底で繋がっていると考えようとしたが、シュッツは、ここで世界についてはフッサールに賛同しながらも、他我については一般定立をむしろ認め、そこに留まろうとする。そこから 2 人の間の「微妙な差異」が生まれているように思われる。

おわりに

こうして見てくると、シュッツ自身が、実は、自然的態度にとどまるのではなく、超越論的な問題に取り組もうとしていたとも言えるのではないか。ただ、シュッツは、フッサールの他者経験についての超越論的な分析を「独我論的な我のうちでの他我の構成」という狭い意味で捉えていたために、自分が取り組んでいることを超越論的な分析と呼ぶことができなかったのではなかろうか。フッサールの現象学的心理学から構想を受け継いだシュッツの現象学的社会学とフッサールの超越論的現象学は、並行して進む互いに補完し合うものであり、微妙な差異があるだけで、領域的な違いがあるわけではない。ここに、さまざまな仕方で、現象学的心理学や現象学的社会学あるいは更には現象学的精神医学と、超越論的現象学ないし現象学的哲学との対話の可能性が示されているように思われる。フッサールとシュッツの交流は、社会学的問題に関心を持つ哲学者たちと哲学的問題に関心を持つ社会学者たちの対話の場を準備してくれた。ここに、臨床と哲学の対話の一つの可能性、ないし、対話としての臨床哲学の一つの可能性を再発見したいと、いま私は考えている。

（はまうずしんじ　臨床哲学・教授）

Husserl und Schutz
── Zur klinischen Philosophie als Dialog ──

Shinji HAMAUZU

In was für einer Welt leben wir? Es richtig zu beschreiben, das macht schon eine gute Aufgabe. Denn wir leben normalerweise, ohne daran zu denken. Diese Aufgabe bezeichnete Husserl als „Ontologie der Lebenswelt.“ Andererseits, nach dem Grund, worauf unsere gelebte Welt besteht, bzw. nach den „Bedingungen der Möglichkeit“ dafür zu fragen, macht eine Aufgabe, welche auf einer anderen Demension liegt. Denn wir müssen dabei unseren Blick darauf richten, was bei der Beschreibung unserer gelebten Welt als Rahmen der Welt funktioniert, was wir normalerweise nicht zu beschreiben wagen, weil wir es für zu „selbstverständlich“ halten. M.a.W., fragen wir danach, was die Erscheinungen erscheinen lässt, aber nicht selber erscheint. Diese Aufgabe bezeichnete Husserl als „transzendentale Phänomenologie.“ Die Aufgabe der Philosophie, die er so nannte, ist, weder „Selbstverständlichkeiten“ in der Lebenswelt zu verneinen, noch zurückzuweisen, noch zu beseitigen, sondern sie in „Verständlichkeiten“ zu bringen.

Beide obengenannte Aufgaben, d.i. jene von „Ontologie der Lebenswelt“ und diese von „transzendentaler Phänomenologie,“ sind in Wahrheit miteinander verwoben und sich aufeinander verlassen. Jene kann ohne diese abschliessen, fordert diese für ihren Abschluss, während erst nach der Erfüllung jener die Erfüllung dieser möglich ist, und um diese zu erfüllen, wir durch Lernen jener geschickt werden müssen. Eine solche Behauptung können wir da ablesen, wo Husserl in seiner Vorlesung „Phänomenologische Psychologie“ in 1925 beide Stufen von „Phänomenologischer Psychologie und Transzendentaler Phänomenolgie“ erörtert. Das ist gerade der Ort, wo Alfred Schutz dem alten Husserl begegnete und ihn verliess. In diesem Aufsatz möchte ich durch Aufklärung der gedanklichen Verhältnisse beider die einander ergänzende Beziehung der obengenannten Aufgaben als positiv auffassen und einen Anhalt dazu finden, an der klinischen Philosophie als Dialog zu denken.

「キーワード」
フッサール、シュッツ、間主観性、生活世界、超越論的現象学